

原作『#三体』（著者：劉慈欣）は非常に評価の高い作品であるが、難しくてどうしても読み続けることができず途中で放棄した。だが、Netflix で視聴できると知り、『#三体』Season1 全 8 話（2023 年、上海：靈河影視制作）を視聴した。視聴後、making video も観てみた。著者は中国の SF 作家。本作は 2006 年 5 月から 12 月まで、中国の SF 雑誌で連載され、2008 年 1 月に重慶出版社によって単行本が出版された。本作は三部作である。中国において最も人気のある SF 小説の一つとされ、2015 年時点で 50 万組以上を売り上げている。2019 年時点で全世界累計発行部数は 2900 万部を記録しており、20 か国以上の言語で翻訳されている。2015 年、第 73 回ヒューゴー賞の長編小説部門を受賞（アジア人初）。元米国大統領オバマ氏が「三体」シリーズの愛読者であると自ら明かした。松前町立図書館にこの三部作が揃っていることがわかったので、再度トライしてみよう。

その世界観が壮大である。SF 小説の枠を超えて、哲学や社会構造、人間の精神など、多様な要素を組み合わせている。私は、SF はあまり読まないが、この世界観には圧倒される。「三体（3 body problems）」とは何か？ ニュートン力学にある古典的な三体問題を取り込んだものである。とある三重星系には、生きと滅びを繰り返す三体生人がおり、その中の最も新しい世代の三体星人は、地球文明の科学技術より数倍先端なものを有している。

映写版は、著作『三体』3 部作の全体に徐々に登場するオックスフォード大学卒業生 5 名を話のはじめから展開に絡めて散りばめているようで、season1 から活躍するようにしたそう（making video による）。

話は文化大革命の科学者の大批判・虐殺の場面から始まる（中国人こそその発想だろう）。天体物理学専攻の女子大生 Y は、物理学教授である父が紅衛兵の批判を受け、殺されるのを目のあたりにする。その後、紆余曲折を経て中国奥地に巨大なパラボラアンテナを備える「紅岸基地」で、西側の衛星の情報収集をする。真の目的は異星人の探索と交信であった。Y はそこで偶然にも太陽の増幅反射機能を発見し、遥かな遠方と電波で通信することを可能とした。彼女はこの機能を駆使して、密かに地球文明の情報が入った電波を宇宙に送り出し始めた。地球と最も近い恒星系の惑星に生きている異星人「三体星人」がこの情報を受け取った。それから、三体の世界と地球の世界は、関わりを持ち始めた。ここまで観て、何と異星人の地球侵略を阻止する話なのだ、とやっと理解する。

ここからは物理学の知識が必要であるが、できる限り詳細は割愛する。

三体星人たちの世界は、質量がほぼ等しい 3 つの恒星からなるため、その運動は解析的に解くことはできない（多体問題として有名）。三体星人たちが住む惑星は、この三つの恒星の引力で乱れた軌道を取る。もし一つの恒星が惑星を捕まえてその周囲に巡らせたなら、三体星人は定期的な日夜を持つ温暖な環境を享受ししばらく穏やかな発展期を迎える。この時期を「恒紀」と呼ぶ。だがこの安定は続かず、やがて他の恒星の摂動をうけて周回軌道から剥ぎ取られた惑星は 3 つの恒星の織り成す不秩序で不安定な重力場の中をさまよい、長期に渡り日照が続いたり日が昇らない夜が続き、恒星に接近して岩石が溶ける程に熱せられたり、遠ざかって窒素も凍る極寒の気候になる「乱紀」となる。もし惑星が複数の恒星に同時に近づけば、惑星は複数の引力を受けて裂けてしまう。三体星人は乱紀の高温による乾燥や低温による凍結を乗り越えるべく体液を排出し身体を繊維化する「脱水」機能を備えて環境の激変に耐え、恒紀を迎えれば「再水化」して肉体を取り戻す歴史を繰り返したが、それとて必ずしも環境の激変を乗り越えられるとは限らない。このため三体星人の文明は数百回の滅亡を避けられなかった。さらに、彼らの住む惑星の質量は恒星に対して小さく、その運動は翻弄され、三体星系から弾き出されて極寒の虚空を永遠にさまようかもしれないし、最悪の場合は恒星に墜落するかも知れない。かつて三体星系には 12 個の惑星があったが、11 個は既に恒星に呑み込まれ、三体星人の棲む惑星も数百万年後には恒星に呑み込まれると予測されている。そうなれば、三体星人とその文明は永遠に滅亡する。そのため、彼らにとって残った道は、宇宙に移民するのみである。三体星人は、地球移住を目指す。要するに、三体星人は自分たちが生き延びるために地球侵略を目指すことになる。私には時間の単位が日常と違い過ぎて想像を超えてしまう。

その様な状況の中に届いた Y からの情報を得て、僅か 4 光年の近傍に、たった一つの恒星を巡り永遠に恒紀が続き豊かな水に恵まれ生命が栄える夢の様な楽園（地球）が存在することを知った最新の三体文明は、地球より遥かに進歩した科学技術を結集して 1000 隻の大型戦艦からなる艦隊を結成し、征服のため地球へと送り出した。

三体星人と地球人が関わりを持ち始めた後、Y は、富豪の子で環境破壊に心を痛める E に出会い、三体の高度な文明の存在を伝えた。後に膨大な遺産を受け継いだ E は三体の優れた文明を受け入れるべく組織を作り上げ、Y を、この組織の精神的なリーダーとして迎えた。

一方で、三体星人は地球に確実にかつ順調に移民するために、地球文明と人類を消し去ることに決めた。しかし、既に出発した艦隊が地球に到着するまでおよそ400年かかるため、その間に地球の科学技術が三体と同じレベルになるかもしれないと危惧した三体星人は、後続の第2艦隊建造に代えて「ソフォン」(sophon)プロジェクトを開始した。ソフォンとは「智慧のある粒子」のことである。それらで外界の電磁波等を感知し、地球の情報収集を行う一方で、地球の優れた科学者に理論的に説明できない超自然現象を見せて絶望させて自殺に追い込んだ。その後、Yらを捕縛した諸国の政府は、彼女への尋問と船のコンピュータから取り出したデータから、初めて三体の文明に関する詳細資料を手に入れた。しかし、三体文明の侵略者が400年後に地球に来ることに変わりはない。科学の発展がソフォンによって封じられた人類は、来るべき戦いに備えなければならない。三体星人は、ソフォンを介して地球人に「お前たちは虫けらだ」というメッセージを送りつけた。既に圧倒的な科学力の差を見せつけられた上に地球の科学技術の発展も封じられ、最早太刀打ち出来ないと絶望して酒に溺れる科学者を、ある男はイナゴに襲われる故郷に連れ出し、人類がこれまで数多の退治の手段を講じて、イナゴは決して滅ばなかったと諭す(虫けらと呼ばれる人類も異邦人には滅ばされないことを暗示している)。ここでSeason1全8話は終了したが、この先season2、3と制作されることだろう。

科学を否定した中国の文化大革命で始まり、人類の科学文明を破滅に導こうとする異星人の企てで動画は終わっている。

人類の営み、文化、宗教、科学という様々な事柄を融合した壮大な物語である。こんなことを考える人間がいるとは本当に驚きである。世の中は広い。